

人生最期はアナログで…

NHK-B Sで久しぶりに映画『おくりびと』を見ました。上映されていた時には4回も劇場に足を運び、僧侶である私も「おくりびと」の一員であることを深く認識させてくれた作品です。感謝しています。今回は所々カットしてありましたが堪能いたしました。笹野高史が演ずる火葬場のシーンでは、やはり涙があふれました。棺が炉に入っていくシーンです。見事に旅立ちの門の扉を開け「門番」を演じていました。ガチャガチャという棺が炉に入っていく金属音。次に扉が閉まって行く機会音はそのシーンを引き立てていました。「旅立ったのだな…」と、遺族を納得させてくれる音だと感じます。



ちょうど15年前の3月24日に亡くなった父の葬儀を思い出しました。火葬場の横は河川の堤防で桜の並木道で

した。それが満開で青空が広がって穏やかな昼下がりだった事を記憶しています。我が町の火葬場は小さく古く、父の火葬の時も映画よりもくたびれたガチャガチャ音と扉が閉まる音がしました。父は昼間、冬の間室内にあった鉢物を手入れし外に出しその夕方に突然死しました。友引の関係で翌日が通夜式となり徹夜でその準備をしました。日頃交流があるお寺さんに

助けてもらい父を無事におくりだすことができましたのです。私は安堵して人目をはばからず法衣のまま控室で大の字で寝込んでしまいました。

ただ父の旅立ちを見守ってくれた町の職員さんが作業服だったことが残念に思いました。笹野さん演ずる方のように門番として制服と帽子を着用して欲しかったです。職業柄、色々な火葬場へ行ってみると、その自治体がどんな所であるか見えてくるように思います。思いやりある「やさしい町」であったりとかです。私は町長さんや役場の方にその制服着用のことを何回かお願いして2年後に実現しました

先日葬儀式の後、岐阜県内のある火葬場へ行きました。新築されたばかりの火葬場のようです。とてもお洒落な場内で、ここでゆったりとコーヒーを飲んでも違和感のない室内です。霊柩車が到着し棺が移動式寝台車へ移されます。今までですとその職員の方が手で押して窯まで移動していました。最新式のここは違いました。寝台車に誰も手を触れていないのに窯のある方向にととても静かに動き始めました。普段でしたらイライラしてしまう程のゆっくりした速度です。私の読経が終わりロボットの寝台車は再度ゆっくりと動き始め、お洒落な扉が開き寝台車は音も立てずその奥へ吸い込まれて行きました。私は、作業着姿でも良いから、ガチャガチャという音がするアナログ式が良いかな…

西暦2038年、予想では、日本全国で火葬場不足が深刻な問題になるそうです。 俊徳丸